

さううたれ、老松の並ぶ長い参道の玉砂利をふみしめて車に乗り、平田市を經由湖北を巡って湖を一周、心ゆくまで深まりゆく出雲の秋を楽しむことができた。

十一時四十分松江着。

遠江浜松十二万石の城主堀尾忠氏が、関ヶ原合戦の功によって、出雲・隠岐の二か国二十三万石に封ぜられて、当初尼子氏の富田城（月山城）によつたが、慶長十二年着工、五か年の年月をかけて完成した。別名千鳥城ともいう。本丸へ登ると、ちょうど天守閣は修理中で、周囲に鉄棒の足場を組んでいた。

よく見れば山陰の空に千鳥が舞上ろうとするように、大破風が起状につくられ、下見板張の下層と白亜の上層のコントラスト二層の四隅と付櫓に大きく口をあける石落し、また最上層の内部望楼など、この天守は武骨さがあふれ、同時代に築かれた姫路城の天主に比べると桃山時代の古式な手法を伝えている。質実本位の力量感あふれる美しさをそなえた時代の傑作といわれる。

山陰地方の特色は山城が多いことである。戦国期の鳥取城、益田城、富田城、近世で

は米子城、津和野城、萩城が著名である。その中で松江城は唯一の近世の平山城であり、天守の現存する稀な城郭である。

お城を出て市内の武家屋敷（ヘルン邸を訪れる。玄関は開いたままで誰もいない。待つこと暫く、やっと入ることができた時は富沢さん外数人だけしかいなかった。

邸内二百余坪と広く、建坪は四七・七五坪という。案内されたのは六畳の書斎、つぎの九畳の居間兼寢室、四畳の居間で、使用された机、椅子、ペン皿、キセル等遺品が陳列されてあった。

北側の書斎に向つて蓮池の庭が造られ、それが居間にそつて前庭へと連なつており閑静な邸宅である。前庭にはさるすべりと椎の原木がデンと居すわつていた。

先生は中の間の九畳で煙草を吸いながらよく庭を眺めたそうだ。葉巻と刻煙草が好みで、キセルは数十本も揃えていたという。

松江で昼食、出雲路に別れを告げて一時間十分発、中国山脈を越えて広島へ――。

赤名峠では雲も切れ快適な秋晴れとなる。出発の折、高木会長より挨拶があつたが羽柴先生の教えのように、旅を通じて研さ

んをつみ、知識を広めるとともに、この機会に会員の皆さんと話し合い、お互に交流を深めていきたいと思いつつ――。

（おわり）

山陰旅行雑詠

高木嘉吉（佐伯市藤原）

史談会山陰探訪のバスの旅

鳥取や砂丘は高し雲かかる

松江城封建領主の夢の跡

八雲邸人柄偲ぶたたずまい

宍道湖は出雲神話の生みの親

日御碕の白亜の塔は高く立つ

おおよしる仰ぐお屋根に千木はゆる